

潤
と
樹
来
の
大
冒
険

敦賀市立松原小学校

六年

かしわぎ
柏木優里
こんどうはるか
近藤遥香
きたのまほ
北野真帆



各務原市立稲羽西小学校

六年

あなだはるか
穴田晴香
いわいさき
岩井咲樹
にのみやみさと
二ノ宮美里

「ふわあゝ。おはよう」

「お姉ちゃん、おはよう。もうちよつと早起したらどうなんだよ」

「朝は苦手なのよ」

姉は樹来、弟は潤。二人は双子の姉弟です。今日は学校。遅刻ぎりぎりの朝食です。二人が急いで食パンを食べようとすると、バターがなぜか塩胡椒に変わっています。

「あれ。おかしいぞ」

「あら、塩胡椒でもおいしいのね」

「まあ、いいか」

双子は特に気にせず、朝食をすませ、学校に向かいました。学校に行く途中、いつも潤は近所で飼われている犬をなでます。今日もなでようとした瞬間、犬が吠えました。いつもと違う様子に潤はびっくり。手を引っ込みました。すると、どこからか、かすかにクスクスという笑い声がしました。犬の耳の横がキ

ラキラ光っていましたが、双子は気づきませんでした。

「ただいま。今日は、犬に吠えられるし、ドアが勝手に開くし、変な日だったなあ」

「潤もだったの。私もおかしなことばかり」

その時、机のかげで、何かがキラキラ光りました。

「あははは。面白い」

「だ、だれ」

「おどろかせてしまったみたいね。私は妖精のエターナ。人には見えないの。あなたたちの心に話しかけているのよ。早速だけど、あなたたちには、わたしたちの世界に来てもらおうわ」

突然、目の前が暗くなりました。気づいたとき、二人は花畑にいました。木

も花もすべてがパステルカラーです。でも、だれの姿も見えません。

「ステキ。でも、ここはどこなの」

「さっき言ったとおり。ここは私たちの妖精の世界」

「えええ。どうして俺たち来たんだ、妖精の世界に」

「私、来てみたかったんだあ。うれしい」

「おいおい。でも、どうして俺たちを連れてきたんだ」

二人は妖精の世界に来て、初めて、エターナの姿を見ることができました。

「私たちの世界は、昔は平和だったの。でも、街はずれにあった山が突然噴火して、街が焼け落ちてしまったの。噴火を起こしたのは、魔法使いのルシファ。

街の宝物『クリスタルローズ』がねらいなの」

妖精のエターナは深刻な顔です。

「『クリスタルローズ』ってどんな宝石なの」

「『クリスタルローズ』を三つ集めると、何でも願い事がかなうのよ。魔法使

いのルシファは、私たち妖精の世界にやってきて、私たちを支配しようとするの。そこで、ルシファを退治するのを手伝ってもらいたくて、あなたたちを連れてきたの」

「ええく。俺たちが魔法使いを退治だって」

「許せない。だんぜんファイトがわいてきた」

「ええく。やるんだ、お姉ちゃん」

街の方から、大きな音が聞こえてきました。

「たいへんです。エターナさん！」

「ミキナー、どうしたの」

「また、火山が噴火してらんです。ルシファが魔法を使ったみたいですよ」

「さあ、潤いくわよ。エターナ案内して」

噴火する山に着くと、そばには火の怪物が暴れています。

「あれは、指名手配中のルシファが変身してるんだわ」

「お姉ちゃん、いったいどうやって退治するんだよ。エターナ、何かいい方法があるのかい」

「それが……。昔、おばあちゃんが言っていたの。人間の双子の姉弟パワーがあれば退治できるって」

「ええええ。それだけ。でも、なぜ双子じゃないといけないんだ？」

「そっかあ。そこが考えるポイントね」

「ああ、『クリスタルローズ』がっ！」

二人が考えているうちに、魔法使いルシファは、『クリスタルローズ』をうばって逃げていこうとしています。

「エターナ、ありがとう。妖精たちの宝はいただいた。残り二つの宝石も時間の問題だな。ははははは！」

「もう終わりだわ」

エターナは泣きくずれてしまいました。

「何言ってるのエターナ。おのれ、悪者魔法使い。私たち樹来・潤双子のパワーを知らないの」

「おいおい。お姉ちゃん、どんなパワーなんだ。もしかしていい方法を思いついたのか」

「しいつく。そんなこと思いついてないわよ。でも、負けられないでしょっ」

「そ、そうだな。悪者めっ。俺たちにはかなわないぞ」

魔法使いルシファはギロツとにらみました。でも、ニヤツと笑いながら、去って行ってしまいました。

「行っちゃったあ。大変なことになってしまった。仲間みんなに、なんて言えばいいのかしら」

悲しむエターナを、二人はただ見つめるだけでした。★

「大丈夫よ。私達がなんとかするわ」

「そうだよ。大丈夫だよ」

二人は、エターナを元気づけるように言いました。

「ありがとう」

エターナは、涙をぬぐいながら言いました。

「ルシファは、どこにいるの？」

樹来が言いました。

「あそこよ」

エターナが指さした先には、巨大な城がありました。

「うそだろ。あんな所にいるのかよ」

と潤が驚いたように言いました。

「……行きましょう！」

決意したように樹来が言いました。

「でも、ここからかなりの距離があるぞ。どうするんだ」

潤が言いました。

「それなら、大丈夫！」

エターナが少し元気になって言いました。

「わたしが、あなたたちをそのお城まで連れて行くわ」

「そんなことができるの？」

樹来がいました。

「できるけど、あなたたちをワープさせたら、わたしは一緒に行けないの」

「じゃあ、あんなお城に二人だけで行かなきゃなんなの？」

遠くに見えるお城は、とても不気味に見えます。

「がんばってね。あと、これを渡しておくわ」

「何だ、これ」

エターナが渡してくれたのは、白銀の剣と、黄金の剣でした。

「これで、ルシファはたおせるわ。二人でクリスタルローズを取り戻してきて」

「でも、どうやっ……」

潤が言いかけたとき、

「じゃあ、いくわよ！ 準備はいい？」

そう言っつてエターナが呪文を唱え始めました。

「うわあ、体が！」

二人の体がすうっと消えていきました。最後にエターナが、

「がんばってね〜」

と言っているのが聞こえました。

どすん。

「痛ったあ、ここはどこなの？」

樹来が言いました。すると潤が、

「見ろよ。城がある」

二人の前に立ちはだかる巨大で不気味な城がありました。

「ここにルシファがいるの？」

樹来が聞きました。

「そうじゃないか、多分……」

その時、

「アハハハ。よく逃げずに来たな。人間の子どもたちよ」

地の底から響くような恐ろしい声がして、つい、その声に後ずさってしまいました。

「ル、ルシファ」

「おまえらから攻撃しないなら、こちらから行くぞー」

ルシファは、そう言って呪文を唱えました。すると、ルシファの口から炎が放たれました。

「うわあ。そつ、そうだ、この剣で」

潤が黄金の剣でルシファの炎をはね返しました。

すると、跳ね返した炎が運良くルシファに当たりました。

「うわあああ。貴様、よくもっ。皆殺しだっ」

ルシファは怒り出し、二人に襲いかかってきました。

「ど、どうしよう。おこっているよ」

二人は逃げるので精一杯でした。

（ねえ、聞こえる？ エターナよ！）

二人の頭の中にエターナの声が響きました。

「エターナ、今、大変なの。助けて！」

（わかったわ。二人ともよく聞いて。双子パワーを使うのよ）

「どうやってだよ」

潤があわてて聞きました。

（今、調べて分かったの！二人で手をつないで二本の剣であいつを切るの！）

「わかったわ。潤、やろう！」

二人は手をつないで、ルシファを切りました。すると、

「ウガアアアア——。き、貴様あああ——」

ルシファは、叫び声をあげながら消えていきました。すると、そこに『クリスタルローズ』が落ちました。

「やったあ」

（ありがとう、樹来。潤。『クリスタルローズ』を取り戻してくれて。あなたたちを家まで送るわ）

樹来、潤は、家まで送ってもらいました。

二人は、大変だったけれど、妖精の世界を救うというすばらしい大冒険をしたのでした。